

## 子宮頸がん検診で発見された子宮体癌の検討（LBC法の細胞像について）

公益財団法人福島県保健衛生協会<sup>1)</sup>

公益財団法人福島県保健衛生協会細胞診管理センター<sup>2)</sup>

医療法人徳洲会羽生総合病院<sup>3)</sup>

公立大学法人福島県立医科大学医学部病理病態診断学講座<sup>4)</sup>

公立大学法人福島県立医科大学医学部産科婦人科学講座<sup>5)</sup>

岩脇涼夏（CT）<sup>1)</sup>、斎藤美穂（CT）<sup>1)</sup>、羽野真貴（CT）<sup>1)</sup>、鈴木御幸（CT）<sup>1)</sup>、  
栗田和香子（CT）<sup>1)</sup>、巖美希（MD）<sup>2)</sup>、森村豊（MD）<sup>3)</sup>、川名聡（MD）<sup>4)</sup>  
古川茂宜（MD）<sup>5)</sup>、添田周（MD）<sup>5)</sup>、渡邊尚文（MD）<sup>5)</sup>、藤森敬也（MD）<sup>5)</sup>

【目的】子宮頸部細胞診で発見された子宮体癌例の発見状況と、従来法とLBC法(SurePath法)の細胞像の差異について検討した。

【対象・方法】1)2015～19年度に従来法を実施した351,637例と2020～21年度にLBC法を実施した128,350例において、子宮体癌が発見された63例を対象とし、子宮体癌発見率、年代別件数と問診情報、検診時判定内訳、精密検査結果を経年的に調査した。  
2)細胞像は従来法(2018～19年度)の子宮体癌18例とLBC法(2020～21年度)の16例、計34例について背景、集塊{形状、細胞数(<50個、50個≦、200個≦)/1集塊}、核所見を見直した。MW-U検定を用い、 $p < 0.05$ をもって有意差ありとした。

【結果】1)子宮体癌63例は従来法47例(発見率0.013%)、LBC法16例(発見率0.012%)だった。いずれも50歳代が最も多く29例、問診票より閉経前13例、閉経後50例、不正出血は29例に認めた。判定内訳はAdenocarcinoma19例、AGC42例、ASC-HとOtherが1例ずつであった。組織型は類内膜癌が53例、明細胞癌と漿液性癌が各5例であった。  
2)細胞像に関し、壊死性背景は従来法18例中10例(55.6%)、LBC法16例中4例(25.0%)、貪食組織球は従来法17例(94.4%)、LBC法15例(93.8%)に認められた。従来法は様々な集塊形状で出現していたが、LBC法では16例中12例(75.0%)が房状のみであった。細胞数50個未満の集塊で占められる例が従来法に比べLBC法で有意に多くみられた( $p = 0.011$ )。

【まとめ】LBC法では壊死性背景を認めることが少なく、異型細胞が小型の集塊で出現することが多い。従来法、LBC法ともにほぼ全例に認められた貪食組織球が出現する際には年齢や症状を考慮し異型細胞の有無を詳細に観察する必要がある。